

物語に「共感」のチカラを。文化を支える3つの応援

～心を動かすクラウドファンディング最新事例をご紹介～

株式会社グローカル・クラウドファンディング

▶ 今回は映画や音楽といったエンターテインメントを通じて、文化を次世代へつなぐ取組みをご紹介します。阿蘇の草原から生まれたドキュメンタリー、震災10年の祈りを音楽にのせた公演、全国のファンが支えた映画ファンド。表現を生み出す人と、それを応援する人の想いが重なって創る力強いストーリーをお届けします。

映画を応援

ドキュメンタリー映画『村で生きる』—阿蘇の草原に生きる親子の記録
～産山村のあか牛の神様・井信行さん 現役、最後の夏～（募集中）

寄附型 | プロジェクトオーナー：映画『村で生きる』製作実行委員会 | 目標200万円



阿蘇の外輪山のふもと、熊本県産山村。信号機もコンビニもない静かな村に、“あか牛の神様”と呼ばれる牛飼い、井信行さん（90歳）がいます。霜降り肉が主流となった時代にあっても、信行さんは草原の循環を信じ、牛と人、草がともに生きる営みを70年以上守り続けてきました。昨年現役を退き、その背中を見つめてきた息子・雅信さんが受け継いでいます。親子二人が暮らすこの村で、草を刈り、牛を放ち、季節とともに生きる日々を4年間に渡って追ったドキュメンタリー映画が『村で生きる』です。

この映画をより多くの方に届けるため、上映や配信に必要な整備・広報の費用を募集しています。

映画『村で生きる』のストーリー

草原が幾重にも重なり、赤褐色の牛たちがのんびりと草を食む。ここは阿蘇連山を南に遠望する熊本県・産山（うぶやま）村。信号機もコンビニもない小さな村に“あか牛の神様”といわれる牛飼いがいる。

井 信行さん（当時86）は、「牛は草で育つのが本来の姿」を信念に、牛と人と草原がつながる循環の形を守り続けてきた。しかし年々あか牛は減り、村は過疎が進み、牛の飼育も廣くなくなり、ついに牛の放牧が止ってしまった。以降は会員専用ページにて公開しております。



ご覧頂くには、入会手続き後、会員専用ページより

井さん親子の姿を記録し、地域の資源を生かした農業に共感してくださる仲間を増やしたい
という想いから、この映画祭で多くの人に見てもらいたいことに、本作は第40回農業ジャーナリスト賞、東京ドキュメンタリー映画祭の長編部門を受賞し、各地で上映も広がりつつあります。
この映画をより多くの方に見ていただきたい。それがこの映画祭の目的です。
ご入会はこちらから

(入力は数分で終わります)

（信行牛）をお届けします。阿蘇の牧草を食べ、のひのびと育った信行牛は、アーラの社員が手作りの挽肉で、アーラの社員からも高い評価を得ています。

会員の方はこちらから